

熊野の
木林から



名勝「滝ノ拝」の滝壺の底には光り輝く宮殿があるというが、「滝の拝太郎」のように徹底した社会奉仕、宗教の修行をした者だけが見ることができる。筆者も魚類調査で潜ってみたことがあるが、水底に宮殿を見ることはできなかった。

怪熊野

「古座川町の怪異(其の二)」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

其の二

古座川は、かつては物流の川として栄え、真砂舟(まなごぶね)が行き来していた。その古座川には多くの河童話が残る。熊野の河童の中には、夏は川に、冬は山に登るといふモノが多いが、古座川の河童は山に登らないようだ。牛を川へ引きずり込んだり、子供を襲ったりしたという。全国的に多いタイプだ。あまりの悪行に、退治される

のであるが、その際に川岸の木が対岸に届くまで、あるいは(炒つてある)豆が芽生えるまでは出てこないことを約束させられる。このタイプの河童話は、上富田、日置川中下流、すさみ、串本町の潮岬より西側、熊野市の飛鳥にもあり、その間の熊野三山エリア、つまり那智勝浦町や新宮市、旧熊野川町、旧本宮町などの河童話とは異なる。これらは冬には山に登る。古座川町は街道で四方に繋がっていたが、その接続先と河童話の類似性は興味深い。むしろ、熊野三山エリアの方が特異的で、古座川町は熊野三山エリアの「外」だったのかもしれない。この圏域の話は、牛鬼(ウシオコ)の話からでも言えそう。熊野三山エリアの話と古座川町の話では、同じような牛の姿をした怪物であるものの、その生態は異なっている。むしろ、すさみ町付近の牛鬼と生態面での共通性がある。古座川は、古座川弧状岩脈、流紋岩質凝灰岩



平成26年に古座川の教育委員会が発刊した「古座川の民話」ふるさとおはなしめぐり(は地道に地元民話)を拾い上げて整理している。古座川町のホームページから購入できる。平成26年には古座川水のまちづくり推進協議会が「古座川風土記」を発刊している。これも素晴らしい地誌だ。

が露出する名勝を多く持つが、岩をかじって崩し、風化させてしまう「岩かじり」、魔物を追い払ったという「一枚岩の守り犬」、猿のような姿をした「ボタン岩の主」、滝壺の宮殿で7日間を過ごしたという「滝の拝太郎」、その類話でもある三尾川の「土井の滝」など地質、地形にまつわる伝承が多く残る。さらに、七川には空を真っ黒に覆ってしまふ大入道の一種の「黒坊主」、月野瀬の「漆が淵の龍」、三尾川の「光泉寺の子授けイチョウ」、小森川の「白鵜の宮」、土砂災害となった「池野山の主」、洞尾(うつお)の「山姥」など、たくさん怪異話、ファンタジーが残る。その理由であるが、古座川が魔物の巣窟だったということではなく、伝承を教訓として大切に語り伝えた先人達が居たこと、それを冊子にまとめた地元研究者達の努力があったからだ。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

